

1. 曾昭岷〔ほか編撰〕『全唐五代詞』（中華書局、1999）p. 812

「雲謠集雜曲子 傾盃樂」

憶昔笄年<sup>(1)</sup>。未省離閤<sup>(2)</sup>，生長深閨苑。閑凭着<sup>(3)</sup>繡床<sup>(4)</sup>，時拈金針<sup>(5)</sup>，凝貌<sup>(6)</sup>舞鳳飛鸞。對粧臺重整嬌姿<sup>(7)</sup>面。知身貌筓料<sup>(8)</sup>，豈交人見<sup>(9)</sup>。又被良媒，苦出言詞相誘詵<sup>(10)</sup>。（上闕）

【語釈】

(1) 笄年 「笄」は「かうがいです」。髪にこうがいをさす。「笄年」で女子が成人したことを言う。▽昔、女は十五歳になると婚約者をきめ、髪に笄をさし、字をつけた。婚約しないときは二十歳になってからこの成年式を行う（『禮記』内則）。

**用例**陳後主「東飛伯勞歌」：年時二七猶未笄，轉顧流眄鬢鬢低。  
（『樂府詩集』卷 68）

唐・竇常「涼國惠康公主挽歌」：玉立分堯緒，笄年下相門。

白居易「對酒示行簡」：復有雙幼妹，笄年未結褵。

王韞秀「夫人相寄姨妹」：笄年解笑鳴機婦，恥見蘇秦富貴時。

(2) 離閤 実家を離れる。「閤」は「閣」に同じ。『總編』は「離合」に作る。

(3) 凭着 ①(着：zhuó)凭れて床に就く。 ②(着：zhe)凭れたまま。

(4) 繡床 華麗な装飾の施されたベッド。詩語「繡床」は盛唐以前には用いられず、中唐期になってから閨怨詩や樂府詩に多用される。

**用例**權德輿「相思曲」：鵲語臨妝鏡，花飛落繡床。

白居易「閨婦」：鵲語臨妝鏡，花飛落繡床。

施肩吾「少女詞二首」其一：嬌羞不肯點新黃，踏過金鈿出繡床。

(5) 金針 潘重規[輯校]『敦煌雲歌謠集新書』・林玫儀[編校]『敦煌曲子詞斟證初編』は「金錢」に作る。「錢」は下平聲一仙で韻字としては「針」より良いが、ここでは「金針」をとる。

(6) 擬貌 まねようとする。写し取ろうとする。〔近代漢語語彙〕？

(7) 嬌姿 なまめかしいようす。人の気をひくようななまめかしい姿。

**用例** 羅虬「比紅兒詩」其七十一：曉向妝臺與畫眉，鏡中長欲助嬌姿。

(8) 筭料 推算する。推し量る。『總編』所引の顔師古『匡謬正俗』に「今人謂算料量度爲『章估』，即『商估』」とある。「筭」は「算」に同じ。「料算」に同じ。〔口語語彙〕〔近代漢語語彙〕？

(9) 豈交人見 『總編』は「□□豈交人見」に作り、二字の缺字があるとする。

(10) 誘誑 『總編』は「誘衞」に作る。「誑」について『廣韻』上聲二十七銑に「誑，誘也」とある。『總編』所引の唐代字書『開蒙要訓』には「誘誑，誇張語」とある。なお、『全唐詩』で「誘誑」を用いた詩は検索し得なかった。白維国主編『近代漢語詞典』（上海教育出版社、2015年）は、『總編』が採用する「誘衞」の語を載せ、用例としてこの「傾盃樂」のみを引く。

なお、「誑誘」の方は散文に用いられる。

**用例** 『魏書』卷二十二「清河王懌傳」：昔在漢末，有張角者，亦以此術熒惑當時。論其所行，與今不異。遂能誑誘生人，致黃巾之禍，天下塗炭數十年間，角之由也。

張九齡「勅吐蕃贊普書」：所云去年七月雋州將兵抄掠，兼有誑誘，雋州之外，尚隔諸蠻，既背吐蕃自行寇抄掠，而乃推託於我。

また、王仲榮「試釋吐魯番出土的幾件有關過所的唐代文書」(『文物』1975年7期)は、トルファン出土の唐代過所に「詿誘」の語が用いられていることを指摘する。

【押韻】(〔 〕内は『廣韻』の韻目)

年〔下平聲一仙〕、苑〔上聲二十阮〕、針〔下平聲二十一侵〕、鸞〔下平聲二十六桓〕、面〔去聲三十三線〕、見〔去聲三十二霰〕、詿〔上聲二十七銑〕

→平仄通押

【聲調】(□は韻字)

入入平□平。去上平入，平上平去□上。平平入去平，平平平平，平去上去平□平。去平平平上平平□去。平平去去去，上平平□去。去去平平，上入平平平去□上。

【通釈】私がまだ若かったころ、十五の歳にこうがいを挿したころを思い出す。まだ実家を離れて他家に嫁ぐということもよくわからず、これまで深窓のうちに育った。華麗な装飾を施したベッドに静かに凭れかかり、ひっきりなしに舞う鳳凰や飛ぶ交う鸞の姿を刺繍にしようとする。化粧台に向かって艶やかなかんばせを再び整える。我が容姿がどれほどのものか、私は十分知っているので、どうして他の人にお見せしようと思おうか。さらに仲人が~~(私の容姿を褒める)~~ことばを無理矢理生み出して、~~世の男性をたぶらかすなんて(耐えられない)~~。私はだまされて(嫁がされてしまった)。



(11) 每道説<sup>(12)</sup> 水際<sup>(13)</sup> 鴛鴦<sup>(14)</sup>，惟指樑間雙鴛<sup>(15)</sup>。被父母將兒<sup>(16)</sup> 疋配，便認多生<sup>(17)</sup> 宿姻眷<sup>(18)</sup>。一旦娉得<sup>(19)</sup> 狂夫<sup>(20)</sup>，攻書業<sup>(21)</sup> 拋妾求名宦<sup>(22)</sup>。縱然選得，一時朝要<sup>(23)</sup>，榮華爭<sup>(24)</sup> 穩便<sup>(25)</sup>。(下関)

【語釈】

(11) 每道説水際鴛鴦 P. 2838V では、上関の「苦出言詞相誘詿」との間空白はなく、そのまま下関の「每道説水際鴛鴦」が続いているが、『總編』も『全唐五代詞』も「苦出言詞…」と「每道説水…」の間で上関と下関が分かると見なす。

(12) 道説 言う。『全唐詩』に「道説」の用例は無い。→口語語彙。

(13) 水際 P. 2838V では「水濟」とあるが、『總編』に従って「水際」に改めた。

(14) 鴛鴦 「鴛」は「鴝」に同じで「鴝雛」を指す。「鴛鴦」で鳳凰の類を指して言う。

【用例】後漢・班固「兩都賦」(『文選』卷一)：後宮則有掖庭椒房，后妃之室，合歡增成，安處常寧，茝若椒風，披香發越，蘭林蕙草，鴛鴦飛翔之列。(「鴛鴦殿」)→文選語彙。

「(後)晉朝饗樂章・初舉酒文同樂」(『樂府詩集』卷十五)：鴛鴦濟濟，鳥獸踴踴。

『全唐詩』において「鴛鴦」は「賢人」や「朝臣・同僚」を指す詩語として多用されるが、「情侶」を指す詩語として用いられた例はない。

ただしこ詞本文は「水際鴛鴦」とあり「鴛鴦」はそもそも水辺にいる鳥ではないことから『總編』は「鴛鴦」を改めて「鴛鴦」に作る。おそらく押韻のために「鴦」ではなく「鴦」とせざるを得なかったと考えられるので、本稿では詞本文を「鴛鴦」に作り「鴛鴦」

として解釈することとする。

(15) 鷺 「燕」に同じ。

なお、『總編』は「每道説水際鷺鷺，惟指樑間雙鷺」二句を以下のように解釈する。

每聞人云鷺鷺燕婉可羨慕，實未盡然。因指梁間雙燕曰：真可羨者在此，即有于飛之樂，又無風波之險。鷺鷺貴重，居於池苑，人不常見。在民間可比興者，亦惟梁燕耳。按之辭旨，鷺鷺正如「朝要榮華」，有風險，終不若貧賤夫妻，安然偕老為穩便也。

(16) 兒 女子の自称。

**用例**「木蘭詩」(『樂府詩集』卷二十五)：願馳千里足，送兒還故鄉。

(17) 多生 仏教用語で、何度も生まれ変わることを、数多くの生を経めぐることの意だが、ここでは前世からの宿縁の意。

**用例**白居易「味道」：此日盡知前境妄，多生曾被外塵侵。

白居易「病中詩十五首」：我亦定中觀宿命，多生債負是歌詩。

(18) 姻眷 夫婦の縁。

『全唐詩』において「姻眷」の用例は見いだし得ない。

**用例**白居易「同夢得暮春寄賀東西川二楊尚書」：魯衛定知連氣色，潘楊亦覺有光華。[自注]予與二公皆忝姻眷。

(19) 娉得 娶る。

**用例**雲謠集雜曲子「鳳歸雲 閨怨」：娉得良人。

(20) 狂夫 妻が自分の夫を指して言う言葉。

**用例**李白「代贈遠」：妾本洛陽人，狂夫幽燕客。

李白「擣衣篇」：玉手開緘長歎息，狂夫猶戍交河北。

盧綸「妾薄命」：妾年初二八，兩度嫁狂夫。

施肩吾「古別離」：古人謾歌西飛燕，十年不見狂夫面。

劉禹錫「竹枝」：憑寄狂夫書一紙，住在成都萬里橋。

劉禹錫「浪淘沙」：銜泥燕子爭歸舍，獨自狂夫不憶家。

→樂府詩に用いられる詩語。

(21) 攻書業 「攻書業」で読書して科挙に投ずることを言うのであろうが、この表現は他書には見られない。「攻書」は『全唐詩』に一例見られる。

**用例** 王貞白「贈劉凝評事」：談史曾無滯，攻書已造微。

(22) 求名宦 名声と爵禄を求める。

**出典** 『漢書』卷七十一「疏廣傳」：在位五歲，皇太子年十二，通論語、孝經。廣謂受曰，「吾聞『知足不辱，知止不殆』，『功遂身退，天之道』也。今仕宦至二千石，宦成名立，如此不去，懼有後悔，豈如父子相隨出關，歸老故鄉，以壽命終，不亦善乎。」

**用例** 顧況「別江南」：將底求名宦，平生但任真。

白居易「蘭若寓居」：名宦老慵求，退身安草野。

(23) 朝要 朝廷の高官、要人。「朝要」は『全唐詩』に見られない。

(24) 争 どうして。→唐代口語語彙。

(25) 穩便 自由自在である。→口語語彙。

**用例** 辛棄疾「鵲橋仙 席上和趙晉臣敷文」：高車駟馬，金章紫綬，便語渠農穩便。

**【押韻】**（〔 〕内は『廣韻』の韻目）

鸞〔下平聲二十六桓〕、鸞〔『集韻』=『廣韻』去聲三十二霰〕、眷〔去聲三十二霰〕、宦〔去聲三十諫〕、便〔上聲三十三線〕

→平仄通押

【聲調】(□は韻字)

上上入上去平□, 平上平平平□。去上上平平入去, 去去平平入□。入去去入平平, 平平入平入平平□。去平上入, 入平平去, 平平平上□。  
→平仄通押

【通釈】

人はよく、水際のおしどりは仲睦まじくでうらやましい、というけれど、私はただ、梁の上の、つがいのつばめを指さすばかり（。このつばめこそうらやましい）。父母の命で私はあなたさまに嫁ぐこととなり、それを前世からの因縁と思い込むしかない。ある日、あなた様に嫁いでも、あなた様は学問に没頭してわたしのことを気にもかけず、立身出世の道を求めておられる。たとえ高位高官に抜擢されて(科挙に登第して)、いつか朝廷の要人となったとしても、我が身の栄華などどうして思うとおりになりましょうか。



穩便

穩便，請便之義。辛棄疾《鵲橋仙》詞：「高車駟馬，金章紫綬，傳語渠儂穩便。」此猶云請他放手隨便幹也。《兩世姻緣》劇一：「將羅袖捲，香醪勸，請學士官人穩便。」此勸酒時語，猶云請您儘量隨便飲也。亦有用爲暫別時之客套語者。《麗春堂》劇四：「夫人云：『老相公穩便！我着那歌兒舞女來伏侍老相公。』」《東坡夢》劇二：「正末云：『貧僧告睡去也。』東坡云：『禪師請穩便！』」《瓶江亭》劇一：「牛員外云：『大姐請穩便！等牛璘前後執料去者。』」此等用法，與離別時之稱珍重同。

爭(二)

爭，猶怎也。自來謂宋人用怎字，唐人只用爭字。唐玄宗《題梅妃畫真》詩：「霜綃雖似當時態，爭奈嬌波不顧人！」白居易《題峽中石上》詩：「誠知老去風情少，見此爭無一句詩！」又《燕子樓》詩：「見說綠楊堪作柱，爭教紅粉不成灰！」杜牧《邊上聞笳》詩：「遊人一聽頭堪白，蘇武爭禁十九年！」韓偓《哭花》詩：「若是有情爭不哭！夜來風雨葬西施。」許渾《經故太尉段公廟》詩：「紀生不向滎陽死，爭有山河屬漢家！」皆其例也。此習見，略以唐詩爲例，不備舉。

1. 曾昭岷[ほか編撰]『全唐五代詞』(中華書局、1999) p.813

「雲謠集雜曲子 傾盃樂」

又

窈窕<sup>(1)</sup> 逶迤<sup>(2)</sup>, 貌超<sup>(3)</sup> 傾國應難比<sup>(4)</sup>。渾身<sup>(5)</sup> 挂綺羅<sup>(6)</sup>  
裝束, 未省<sup>(7)</sup> 從天得知<sup>(8)</sup>。臉如花自然多嬌媚<sup>(9)</sup>。翠柳画娥眉<sup>(10)</sup>,  
橫波<sup>(11)</sup> 如同秋水<sup>(12)</sup>。裙生石榴<sup>(13)</sup>, 血染羅衫子。(上闕) \*

1

【語釈】

\* 1 P.2838V では、上闕の「血染羅衫子」と、下闕「觀艷嬾語軟言輕」との間に空白はない。『總編』も『全唐五代詞』も「血染羅衫子」と「觀艷嬾語軟言輕」の間で上闕と下闕が分かれると見なす。

(1) 窈窕 女性のおくゆかしく、上品なさま。

【出典】『毛詩・周南・閔雎』: 窈窕淑女、君子好逑。

(2) 逶迤 うねうねと曲がってのびる、また、うねうねといくさま。たおやかなさま。晝韻語 駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇。〔王逸注〕蛇一作移、一作逶迤。

『楚辭・遠遊』: 玄螭蟲象並出進兮、形繆虬而逶蛇。〔王逸注〕蛇一作迤。

『楚辭・九歎・離世』: 遵江曲之逶移兮、觸石碕而衡遊。〔王逸注〕一云遵曲江之逶蛇。

(3) 貌超傾國應難比 『總編』・冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』は「體貌超群、傾國應難比」と翻字する。林玫儀『敦煌曲子詞斟證初編』は「□貌超□、傾國應難比」と翻字する。

(4) 傾國 君主が色香に迷って自分の国をあやうくするほどの

女性。絶世の美人のこと。

**出典**前漢・李延年歌：北方有佳人，絶世而獨立，一顧傾人城，再顧傾人國。寧不知傾城與傾國，佳人難再得。（『漢書』卷九十七上「外戚傳・孝武李夫人」）

(5) 渾身挂綺羅裝束 冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』は「渾身□掛、綺羅裝束」と翻字する。『總編』は「渾身挂綺羅、裝束□□」と翻字する。

(5) 渾身 全身。

**用例**杜荀鶴「蠶婦」：年年道我蠶辛苦，底事渾身著苧麻。

『雲謠集・内家嬌』：渾身掛異種羅裳，更薰龍腦香煙。（『全唐五代詞』 p. 814）

→「渾身」の語が杜荀鶴「蠶婦」では口語語彙「底事」と共起していること、また『雲謠集』のほかの詞でも用いられていることから見て、「渾身」は口語的要素の強い語か？

(6) 綺羅 あやぎぬとうすぎぬ。転じて、うつくしい着物。

**用例**後漢・徐幹「情詩」：綺羅失常色、金翠暗無精。（『玉臺新詠』卷一）

→「閨怨詩」で用いられる詩語。

(7) 未省 白維国主編『近代漢語詞典』は「未曾、不曾」と釈義する。

**用例**『雲謠集・傾杯樂』：憶昔笄年。未省離閨。（『全唐五代詞』 p. 812）

→近代漢語語彙。

(8) 知 冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』・林玫儀『敦煌曲子詞輯證初編』は「知」を「至」に改める。「知」では意味がとれないので本訳注でも「至」として解釈した。

(9) 嬌媚 なまめかしいさま。「嬌媚」は『先秦漢魏晉南北朝詩』『全唐詩』に見られない語（→詩語でない）。

**用例**柳永「鬪百花」其三：滿搦宮腰纖細。年紀方當笄歲。剛被風流沾惹，與合垂楊雙髻。初學嚴妝，如描似削身材，怯雨羞雲情意。舉措多嬌媚。

柳永「夢還京」：追悔當初，繡閣話別太容易。日許時，猶阻歸計。甚況味。旅館虛度殘歲。想嬌媚。那裏獨守鴛幃靜。永漏迢迢，也應暗同此意。

柳永「尉遲盃」：寵佳麗。筓九衢紅粉皆難比。天然嫩臉脩蛾，不假施朱描翠。盈盈秋水。恁雅態，欲語先嬌媚。每相逢月，夕花朝，自有憐才深意。

→（詩語ではなく）填詞で用いられる語。

(10) 娥眉 →【補説】参照

(11) 横波 女性の流し目をするさまがまるで水が横に流れるようなので、このように言う。

**出典**傅毅「舞賦」（『文選』卷十七）：眉連娟以増繞兮，目流睇而横波。〔李善注〕横波、言目邪視、如水之横流也。

**用例**『雲謠集・鳳歸雲』：眉如初月。目引横波。

→『文選』語彙。→填詞語彙

(12) 秋水 「秋水(秋波)盈盈」ということばがあるように、女性が目に湛える感情が豊かなこと。

(13) 裙生石榴 赤いスカートがまるで石榴の花が咲いたようなように見える。

**用例**萬楚「五日觀妓」：眉黛奪將萱草色，紅裙妒殺石榴花。

→豔詩(豔體詩)で用いられる表現。

【押韻】（〔 〕内は『廣韻』の韻目）

迤〔上平聲五支〕、比〔上聲五旨〕、知〔上平聲五支〕（→至〔去聲六至〕）、媚〔去聲六至〕、水〔上聲五旨〕、子〔上聲六止〕

→平仄通押

【聲調】（□は韻字）

上上平□平，去平平入平平□上。平平去平平平入，去上平平入□去。上平平去平平平□平。去上去平□平，平平平平平□上。平平入平，入上平平□上。

【通釈】

なまめかしくたおやかな、その容貌は、李夫人ほどの傾国の美女を超越し（李夫人でも）比べることは難しいだろう。全身にあやぎぬとうすぎぬを纏ったこの女性は、これまで天から下されたことはなかった（ほどの美しさだ）。かんばせは花のごとく、おのずからなまめかしさがあふれて隠しようもない。美しい眉は、柳のしなやかな葉が描かれたかのように細く、流し目は秋の盈々のごとく感情があふれんばかり。赤いスカートは、まるで石榴の花が咲いたかのように、薄い半衣は血で染められたかのように（とともに鮮やかだ）。

【補説】「娥眉」について

→松浦友久《“娥眉”考—一诗语与歌语之一—》（《唐诗语汇意象论》，原題：『詩語の諸相—唐詩ノート』）

1. 曾昭岷[ほか編撰]『全唐五代詞』(中華書局、1999) p. 813  
「雲謠集雜曲子 傾盃樂」

\* 2 (下関) 觀<sup>(13)</sup> 艷嬾<sup>(14)</sup> 語軟<sup>(15)</sup> 言輕, 玉釵墜<sup>(16)</sup> 素綰<sup>(17)</sup> 烏雲  
髻。年二八久鎮香閨, 愛引鴉兒<sup>(18)</sup> 鸚<sup>(19)</sup> 鵲戲。十指如玉如葱  
<sup>(20)</sup>, 銀蘇<sup>(21)</sup> 體雪透羅裳裏, 堪娉<sup>(22)</sup> 與公子王孫, 五陵年少<sup>(23)</sup>  
風流婿。

【語釈】

\* 2 P. 2838V では、上関の「血染羅衫子」と、下関「觀艷嬾語軟  
言輕」との間に空白はない。『總編』も『全唐五代詞』も「血染羅衫  
子」と「觀艷嬾語軟言輕」の間で上関と下関が分けられると見なす。

(13) 觀 この字について『總編』は「『觀』意與全句不貫, 待  
訂」と述べる。

(14) 嬾 この字について『總編』は「『嬾』是書手化簡爲繁之  
習, 應抵製。」と述べ、冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』・唐圭璋  
『敦煌唐詞校釋』に従って「質」に改める。

(15) 軟 P. 2838V は「載」字のように見えるが、朱孝臧『疆村  
遺書・雲謠集雜曲子』に引用される楊鐵夫の校語、龍沐勛[校]の  
『疆村遺書・雲謠集雜曲子』は「載」を「軟」に改める。

(16) 墜 『總編』は冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』・唐圭璋  
『敦煌唐詞校釋』に従って「綴」に改める。蔣禮鴻「《敦煌曲子  
詞集》校議」(『敦煌變文字義通釋』p. 422-424)もまた「墜」は  
「綴」に通ずると述べる。これらの説に従えば、「玉釵綴」は  
「玉のかんざしを髪につなぐ」と訳せる。

なお、『總編』所引の) 龍晦「唐五代西北方音舉例」は、「墜」(至韻・澄母)と「綴」(祭韻・知母)は、唐五代の西北方言では相に通じるという。

**用例**「敦煌雲謠集雜曲子・拋球樂」：寶髻釵橫墜斜。

「同・内家嬌」：絲碧羅冠，搔頭墜髻鬢。

P. 3994「虞美人」：又被美人和枝折，墜玉釵。

同：金釵釵上綴芳菲。(『全唐五代詞』p. 929)

馮延巳「謁金門」：碧玉搔頭(『尊前集』作「瓏璫')斜墜。

(『全唐五代詞』p. 676)

『花間集』歐陽炯「南鄉子」：耳墜金鐙穿瑟瑟。

李商隱「偶題二首」其一：水文簾上琥珀枕，傍有墮釵雙翠翹。

(17) 縮 たばねる。

**用例**李賀「大堤曲」：青雲教縮頭上髻，明月與作耳邊璫。

(18) 獠兒 子犬。

**用例**王涯「宮詞三十首」其十三

：雪獠兒拂地行，慣眠紅毯不曾驚。

(19) 鸚 P. 2838V は「鸞」字のように見えるが、『總編』も

『全唐五代詞』も「鸚」に作る。

(20) 葱 ①ねぎ。②「璫」に通ずる。ここでは②をとる。女性の白く細い指を喩える。

**用例**元稹「春六十韻」：啟齒呈編貝，彈絲動削葱。

(21) 銀蘇 唐圭璋『敦煌唐詞校釋』および『總編』は「凝酥」に改める。(『總編』所引の) 龍晦「唐五代西北方音舉例」は、「凝」(蒸韻・疑母)と「銀」(眞韻・疑母)では、眞韻が軟口蓋鼻音(velar nasal)/ŋ/から齒茎鼻音(alveolar nasal)/n/に変化して蒸韻と通韻するようになったとする。「凝酥」は、牛・羊・馬などの乳を煮

つめ凝固させた乳製品。ここでは、女性の白く透き通った肌を喩える。

【用例】韓偓「密意」：呵花貼鬢粘寒髮，凝酥光透猩猩血。

蘇軾「薄命佳人」：雙頰凝酥髮抹漆，眼光入簾珠的皦。

(22) 娉 男女の仲だちをしてめあわす。

(23) 五陵年少 → 【補説】参照。

【押韻】（〔 〕内は『廣韻』の韻目）

頰〔質〕〔去聲六至〕、墜〔去聲六至〕、髻〔去聲十二霽〕、戲〔去聲五寘〕、裏〔上聲六止〕、媚〔去聲十二霽〕

→上去通押。

→去聲十二霽が、去聲五寘・六至と通押している。

【聲調】（□は韻字）

平去□，上上平平，入平□，去平平平□。平去入上平平平，去上平平平上□。入上平入平平，平平上入去平平□，平去上上平平，上平平上平平□。

【通釈】

あでやかな姿、ことばもしなやかで、しかもかるやかなその女性は、玉のかんざしを、まとめあげた黒いもとどりにつなげている。年は十六、これまで長い間、芳しい閨(ねや)に閉じ込められ、子犬を引き連れ、鸚鵡にことばを教えてふざけるのが好き。十本の指は、玉のごとく宝石のごとく、クリームのような白い透き通った肌は、うすぎぬのもすそにも透けて見え、公子王孫や、五陵の風流な貴公子にめあわせるにふさわしい。



1. 曾昭岷[ほか編撰]『全唐五代詞』(中華書局、1999) p. 813  
「雲謠集雜曲子 傾盃樂」

(下関) 觀<sup>(13)</sup> 艷嬪<sup>(14)</sup>

【語釈】

(14) 艷嬪 「嬪」の字について『總編』は「『嬪』是書手化簡爲繁之習，應抵製。」と述べ、冒廣生[校]『新觀雲謠集雜曲子』・唐圭璋『敦煌唐詞校釋』に従って「質」に改める。

「艷質」は「(女性の)あでやかで美しい資質」の意で、この場合、「美しい容貌」を指す。

**用例**陳後主「玉樹後庭花」：麗宇芳林對高閣，新妝艷質本傾城。(郭茂倩『樂府詩集』卷四十七「清商曲辭・吳聲歌曲」白居易「冬至夜懷湘靈」：艷質無由見，寒衾不可親。何堪最長夜，俱作獨眠人。

杜牧「傷友人悼吹簫妓」：玉簫聲斷沒流年，滿目春愁隴樹煙。艷質已隨雲雨散，鳳樓空鎖月明天。(『才調集』卷十)

顧夔「虞美人」：少年艷質勝瓊英，早晚別三清。蓮冠穩簪鈿篋橫，飄飄羅袖碧雲輕。畫難成。遲遲少轉腰身嬾，翠鬢眉心小。醮壇風急杏枝香，此時恨不駕鸞皇。訪劉郎。(『花間集』卷七)

柳永「透碧霄」：昔觀光得意，狂遊風景，再覩更精妍。傍柳陰，尋花徑，空恁鞦韆垂鞭。樂遊雅戲，平康艷質，應也依然。仗何人，多謝嬋娟。道宦途蹤跡，歌酒情懷，不似當年。

→樂府詩・艷詩・填詩で用いられる語。